
Eddy Dufourmont × Takahiro Nakajima

[エディ・デュフルモン × 中島隆博 2020年1月29日]

Contents

序 中島隆博（東アジア藝文書院院長）	1
対談 エディ・デュフルモン×中島隆博	2
対談の後に	37
世界の未来を創るために（エディ・デュフルモン）	39
学問は喜びそのものである（中島隆博）	41
対談者について	45

序

中島隆博（東アジア藝文書院院長）

2019年に発足した東アジア藝文書院は、東アジア教養学という来るべき学問のために、その成果を積極的に刊行していこうと考えています。ここにお届けするのは、EAA ダイアログと銘打ったシリーズです。

ダイアログとはプラトンに由来する概念で、dia-logos すなわち「ロゴスを通じて」という古い意味を有しています。そして、その「ロゴス」には、言葉や論理に加えて、万物の根源や批判的な切断という複数の意味が重層的に交差しています。東アジアの概念に翻訳をするならば、おそらく「道」や「文」ということになるでしょう。「道」は語ることであり根源でありますし、「文」もまた言葉であり切り分けられたパターンであるからです。重要なことは、ダイアログは誰かとともに対話を行い、お互いにロゴスを吟味しあって、新しい地平を開こうとすることだと思えます。

EAA ダイアログは、東アジア藝文書院に集っていただいた方々との対話から生まれています。読者のみなさまには、そこに込められた学問への思いや望みを受け止めていただければ幸いです。何ができるかだけでなく、何を欲するのかが、来るべき学問にとってはどうしても必要なことだからです。

現在の covid-19 のパンデミックがあぶり出したのは、「既知」の諸問題でした。それらはすでにわかっていたにもかかわらず、様々な理由から「できない」とされてきたものです。来るべき学問は、そうした「既知」の枠組みを乗り越えるために、真に「未知」なるものに触れる責任があると思えます。

EAA ダイアログを通じて、ともに「未知」なるものを思考したいと思います。

Eddy Dufourmont × Takahiro Nakajima

[エディ・デュフルモン × 中島隆博 2020年1月29日]

中島 今日は、エディ・デュフルモン先生をお迎えして、EAA ダイアログを行いたいと思います。デュフルモン先生は、今はフランスのボルドー第3大学にいらっしゃいますね。

デュフルモン はい。実は名前が変わって、ボルドー・モンテーニュ大学になりました。

中島 そうですか。ボルドー・モンテーニュ大学ですね。ご専門は、日本の歴史、哲学、そして思想史で、とりわけ日本の政治思想史に造詣が深い方です。その内容については、おいおい伺っていこうと思います。初めてわれわれが出会ったのは、デュフルモンさんがイナルコの大学院生の時でしたね。そこで初めてお目にかかって、その後、東大にいらっしゃいました。

デュフルモン とてもお世話になりました。

中島 いえいえ。東京大学大学院総合文化研究科で博士の学位もお取りになりましたし、同時にイナルコでも博士の学位をお取りになりました。初めて会ったのは2002年ぐらいですか。

デュフルモン 2002年なので、もう20年近く経ちます。

幼少時代——ドイツにおけるフランス式教育、歴史学との出会い

中島 本当に立派になられて、わたしも嬉しく思っています。さて、まずは幼年時代のお話を聞きたいと思います。小さいときは、どういうお子さんだったんですか。

デュフルモン 父は軍人でした。そのために、生まれてからずっと、高校時代まではあちこち引っ越しをしていました。そのため、たくさんの地方で育ちました。ノルマンディーで生まれて、4年間ぐらいそこにいました。引っ越しをしてヴァランスという、ちょっと南のほうの、リヨンよりも南にある小さい町で生活しました。その後、1986年にブルターニュに引っ越します。さらに4年間ぐらいはドイツに住んでいました。

中島 ドイツにも住んでいたのですか。ドイツのどちらですか。

デュフルモン ドナウエッシンゲンという西南ドイツのバーデン＝ヴュルテンベルクにある町でした。中学・高校時代は、フライブルクにいました。

中島 フライブルクにいたんですか。

デュフルモン はい。ハイデッガーのフライブルクですね。中学から高校にかけての2年間ぐらいです。だからといってドイツ語ができるわけではないのです。というのも、当時のフランスの軍隊は、アメリカやイギリス軍隊のように、あちこちで自分たちの学校や自分たちのスーパーマーケット、つまりフランス式のスーパーマーケットやフランス式の学校を準備していたのです。すべてフランス式の生活をするためでした。

中島 なるほど、そうした中でフランス式の教育をずっと受けてきたわけですね。

デュフルモン そうです。ですから、せっかくドイツに行ったのに、ドイツ人とも完全に離れた生活をしていました。本当に変でしたね。当時は、ドイツ語ができる学生がフランス人には本当に少なくて。わたしもですが。

中島 小さいときにどういう読書経験があったんですか。

デュフルモン 最初から、もう歴史学者でした。やる気があって、歴史家になりたかったのです。ヨーロッパ史の本ばかり読んでいました。そのため、早い時期に他の人よりも歴史に詳しくなって、いつかヨーロッパじゃなくて、全世界の歴史を知りたいと思い、他の歴史も読み始めました。わたしの世代は、日本の文化をJ-popというかたちで初めて経験したのです。日本に興味を持つようになったのは、そうした背

景があります。

中島 歴史に興味があったというときに、具体的にはどんな本を読んでいたのでしょうか。

デュフルモン 10歳ですかね、古代ギリシアの本です。ギリシアにすごく興味を持っていました。Sixièmeのクラスの時です。Sixièmeは、10歳、11歳に当たるクラスで、フランスでは10歳～13歳までに、古代と中世を勉強します。高校で、近代と現代というふうに分かれるのですが、日本と違って基本的にはフランス中心、ヨーロッパ中心の歴史です。それ以外は、日本とかアフリカですかね。しかし、アメリカはほんの少しですし、アジアもほんの少しです。大体18歳のときに、日本か中国のことを初めて耳にします。当時は日本のことでは明治維新とかでしたけれども。

中島 なぜそんなに古代ギリシアが面白かったんですか。

デュフルモン 古代ギリシアだけではなくて、古代エジプトにも興味がありました。古代史を内容とするクラスを受けて、それでもっと知りたいという気持ちになったのでしょうか。

中島 よく考えてみると、エジプトにせよギリシアにせよ、フランスと直接には繋がっていないですね。

デュフルモン そうですね。当時、わたしはラテン語のクラスを取ったひとりでしたが、古代語のクラスを取る人はほとんどいませんでした。勝手な発言ですけれども、優秀な学生しか取っていない感じでした。ラテン語とギリシア語のクラスは一緒でしたが、ギリシア語は全然勉強しなかったですね。古代ギリシアに興味を持っていたのに、なぜでしょう。

中島 ギリシア語はやらなかったのですか。

デュフルモン ブルターニュでは、ギリシア語のクラスはなかったんですよ。ラテン語だけでした。ラテン語を勉強したときは、やはりローマ帝国の歴史を勉強するかたちでしたけれども。

中島 そうすると、かなり伝統的なフランスの教育を受けたという感じですね。

デュフルモン そう思いますね。

中島 それが少年時代のデュフルモンさんにとっては、非常に魅力的だった

わけですね。

デュフルモン そうです。

中島 文学はどうだったのでしょうか。

デュフルモン はっきり言えば、文学は一番苦手でした。文学のクラスで、12歳、13歳からは作文があって、話を創造して書いてくださいというものがありました。それがなぜか苦手で、小説を読むのもそんなに得意ではありませんでした。

中島 それは面白いですね。

デュフルモン フランス文学の古典のようなものは読みました。15歳から、つまり高校時代からはやっぱりプルーストとかを読まされますから。

中島 大文学ですね。

デュフルモン そう、大文学です。残念ながら、いわゆる大文学にはなぜかあまり興味を持てなかったのです。

宗教への関心：ムスリムの母、キリスト教

中島 家庭は、どういうご家庭だったんですか。お父さまが軍人だったら、厳しかったのでしょうか。

デュフルモン 父はあまり家にいませんでしたね。ギリシャとかボスニアとかエジプトとか、あちこちに派遣されて、基本的に育ててくれたのは母でした。

中島 お母さまはどういう方だったのでしょうか。

デュフルモン 彼女はモロッコの出身で、たぶん他のフランス人とは違った教育を受けていたと思います。

中島 別の教養をお持ちだったのでしょうか。

デュフルモン 他の人と違って宗教が重要でした。

中島 非常に宗教的な方だったんですか。

デュフルモン はい。ムスリムらしく宗教心がけっこう強かったと思います。でも当時は周りがみんなキリスト教で、しかもブルターニュは伝統的にはキリスト教が強いものですから、わたしが「キリスト教徒になります」と言ったところ、母はがっかりしましたが、一切反対はしませんでした。

中島 デュフルモンさんは、じゃあ小さいときはキリスト教徒だったのですね。

デュフルモン 10歳から自分の意志でキリスト教徒になりました。当時のわたしは私立学校に通っていたので、それが普通でした。キリスト教徒になる決心をしてから、1年、2年経って、受洗したらすぐに疑問が湧いてきました。神は三位一体であるという話を聞くと、どうも変だなと思ったのです。

中島 特殊な考え方ではありますよね。

デュフルモン キリスト教の話と、古代ギリシアなどの伝説を比較して、どちらも不思議な話だなと思ったのです。いったい人間は、なぜそのような話を信じるのかと思いました。20歳ぐらいまでは、他のフランス人と同じように、そんなに宗教に興味を持ってはいませんでした。

中島 当時のフランスの若者は、どちらかというとなし論に行く人が多かったんじゃないですか。

デュフルモン 多かったですね。ただ、地方によって事情はちょっと違います。ブルターニュは、どちらかといえばなし論ではない地方で、伝統的な信仰がありました。それでもブルターニュにも、なし論者はけっ



こう多くいました。今はさらに増えていると思います。

中島 ご家庭の中では宗教に関する話を、そんなにしたわけじゃないのですか。

デュフルモン 話自体はあんまりしていませんでした。ブルターニュで私立学校を運営していたのは神父ではなくて、神父とモンクの中のちょっとあいまいな資格を持っているキリスト教系の団体で、フレール・ド・ラムネー（frère de Lamennais）というものでした。そのラムネーという人がフェリシテ・ド・ラムネーの兄でした。フェリシテ・ド・ラムネーは、キリスト教系社会主義者ですね。19世紀の人で、初めて無神論的な発言をした人で、同時に社会主義者でした。当時はもちろんそんなことは全然知りませんでした。その兄のジーン・マリエ・ド・ラムネーという人が神父で、新しい教育団体をつくったのです。農村で、農民にしっかりとした教育をするような団体ですね。わたしが通っていた私立学校は、その1つでした。

中島 フランスにはそういう学校が多いのでしょうか。

デュフルモン わたしの少年時代まではけっこうあったのですが、今は少なくなっているかと思います。

中島 フランスというと公立学校が多いというイメージもありますが。

デュフルモン 実はちょっと違います。私立学校が多くて、エリートの人をよく自分の子どもを私立学校に入れます。

中島 でも大学は、基本的には国立が多いですね。

デュフルモン そうですね。でも学校にはもう1つの体制があって、クラス・プレパラトワール（classe préparatoire）と言います。それは私立学校ではないんですが、とにかく両方が同時に、2つの体制が存在しているのです。その私立学校の神父さんたちが母の友人になって、よく家に来ていました。いまだに親しい関係です。すごくいい人たちで、哲学とか宗教の話を彼らが来たときによく聞きました。

中島 そうするとデュフルモンさんのご家庭というのは、伺っている限りでは非常に伝統的なフランスの教育の中にいた、という感じがいたしますね。

デュフルモン そう思います。

日本との出会い、大学への進学

中島 中高のときにJ-popに出会ったんですか。

デュフルモン J-pop というか、みんなテレビをよく見ていました。インターネットはまだないので、テレビでした。当時は、ドホテという人が日本のアニメを初めて紹介して、いつの間にか子どもたちが見ていたテレビの内容が完全に変わり、ほとんどすべてが日本のアニメになりました。

中島 聖闘士星矢が話題になった頃ですね。

デュフルモン そうです。ドラゴンボールもそうですね。日本のアニメを初めて経験したのは、わたしの世代です。今は第2、第3世代ですけれども。それを見て、もちろん面白かったですけれども、やっぱり歴史のことを思っていましたから、アニメの中の歴史的な部分に惹かれていきました。そのときに日本とかアジアを意識して、興味を持ったのだと思います。

中島 その後に大学を選びますよね。

デュフルモン はい。実は高校を卒業する直前、バカロレアを受ける1年前に、初めてクラス・プレパトワールのことを聞きました。当時はクラス・プレパトワールのことを全然知りませんでしたから、大学に行こうと思っていました。今ではそれは大きな間違いだったと思います。優秀な学生や真面目な学生は、基本的にクラス・プレパトワールに行くはずですよ。あとはエコール・ノルマルのようなところですよ。ところが、わたしは当時はクラス・プレパトワールのことを何も知りませんでした。ですから、なんでわたしに聞くんだろうと思って、「いや、大学に行きます」と言いました。いまだに覚えていて、相手は驚いて「本当にいいの？ エコール・ノルマルに行きたくないの？」「いや、大丈夫です」とか適当に答えていました。でも大学に入塾してから、「間違った、失敗した。やっぱりクラス・プレパトワールに行ったほうが良かった」と気付きました。当時はたぶん精神的にいえばまだ幼かったのです。

中島 まだ準備ができていなかったわけですね。

デュフルモン 準備が全然できていなかった。母は一生懸命に教育を受けさせようとしたけれども、他の家族と違って彼女は大学へ一切行ったことがないですよ。父もそうです。ですから高等教育の存在はよくわからなかったんですね。それに対して、昔も今もフランスのブルジョアの家庭は、やっぱり最初からすべて知っているわけです。

最初から子どもに「ちゃんと真面目に勉強しなさい。なぜなら、それが後の人生をすべて決めるから」。優秀な高校に通った上で優秀なクラス・プレパラトワールとかエコール・ノルマルとかに、優秀な家庭の子どもは行くわけです。

中島 フランスというのはそういう意味でも、昔の言葉で言うと身分制ですが、今でもある種の階級というのがやっぱりあるんでしょうかね。

デュフルモン そうですね…。はい、あります。

中島 教育によってわかるんですか。

デュフルモン そうです。いまだにそうなんですけど、例えばエコール・ピュブリックか、エコール・プロフェッショナルといった実務教育があります。それを受ける学生がいて、残りの半分が国立の教育を受けるんですが、優秀な学生はターミナル・セー (terminal C)、つまり科学を専門とするクラスに入ります。わたしは哲学を専門にしました。でも優秀な学生は、別に科学に興味がなくてもみんなターミナル・セーでしたね。一番難しくて、一番真面目というイメージがありました。

中島 それもあんまり変わっていないんですね。

デュフルモン 変わっていません。でもわたしは当時、哲学に対してすごく興味を持っていて、哲学を専門とするクラスを受けたわけです。

中島 それで大学に行ったのですね。

デュフルモン はい。ストラズブールのマルク・ブロック大学です。そこで、歴史の学士号を取ったんです。3年間いました。

中島 4年じゃないんですね。

デュフルモン そう、4年じゃなくて3年です。フランスの体制です。歴史を学んで、傍らで日本語をちょっと勉強し始めました。歴史はやはり高校のように完全にヨーロッパが中心で、受けたクラスは古代史、中世史です。

中島 相変わらずですね。

パリ、INALCOへ

デュフルモン 相変わらずです。同じ時代区分なんですけど、高校よりも深く学びます。ただ、フランス、ヨーロッパ、西ヨーロッパ以外の歴史は一切教えないんですよ。

中島 不思議なのは、高校までの歴史の話を聞いていても、アフリカがちょっと出てきましたよね。フランスというのは、植民地を持っていて、その歴史がありますね。そういうことは教えないんですか。

デュフルモン 全然です。変ですよ。例えばアラブの出身のわたしは、当時はアラブ人のことを十字軍との戦争というかたちで学びました。その後、ウマイヤ朝とかアッバース朝の存在を知ったんですが、詳しく深くは学んでいません。それ以外のアフリカの歴史とかアジアの歴史、東南アジア、インドの歴史はまったくないんです。

中島 それは逆に不思議ですよ。というのも、デュフルモンさんが教育を受けていた頃は、ある種のポストコロニアリズムがすでに世界中のディスコースの中で重要な位置を占めているときでしょう。

デュフルモン 当時ポストコロニアリズム的な世界観を経験したのは、もしかするとエコノミー・シューペリウールとかクラス・プレパラトワールとかの人だけだったかもしれません。

中島 本当に意外ですね。

パリ、INALCOへ

デュフルモン だから他の国の歴史はどうなのかと思ったのです。歴史学の学士号を取って卒業した後に、イナルコ (INALCO) に行こうと思ったのは、まさにそのためでした。日本の歴史を本気で勉強したいならイナルコしかありませんでした。今はちょっと変わりましたがけれども、当時は、イナルコ以外の大学は日本語とか日本の文化を教えていませんでした。20、21歳のときにストラスブールから引っ越しをして、パリに行きました。

中島 パリに。初めてのパリですね。

デュフルモン そうです。わたしは完全に田舎の人ですので、あの大きな都市を経験した当初はちょっと大変でした。しかも幼かったので、大人になるためのいい経験でした。

中島 当時のイナルコというのは、もうイナルコという名前でしたか。それともまだラング・ゾー (Langues' O) でしたか。

デュフルモン ラング・ゾーはただの呼び方にすぎません。東洋諸言語 langues orientales ですね。イナルコは、Institut national des langues orientales という名称で、1795 年からずっと同じです。フランス革命以前は、École des langues de jeunes という名称でした。若者のための言語学校ですね。その学校をつくったのは、ルイ 14 世のときのジャン＝バティスト・コルベールです。そこで、ペルシャ語、アラビア語そしてトルコ語を専門とする翻訳者、通訳者を育てるためのものでした。19 世紀になると、フランスの植民地が広がるとともに、日本語、中国語、そして東南アジアの言語の教育も始めました。フランス革命の時代に、イナルコになりますが、それはエコール・ノルマル・シュペリウール、エコール・ポリテクニク、エコール・デ・ミヌヌのようなグラン・ゼコールと同じです。しかし、イナルコはグラン・ゼコールのはずなのですが、入学試験がありません。つまり大学のような体制でありながら、資格はグラン・ゼコールなんです。

中島 ちょっと特殊なんですね。

デュフルモン 特殊です。当時は学校のキャンパスがいくつかありました。日本語があったのは、ポルト・ドーフィンで、昔の NATO 本部があったところですよ。その建物はパリ第 9 大学と共用でした。パリ第 9 大学はファイナンスを専門とする大学で、フランスで一番リッチな子どもが通っています。それに対して、イナルコはどちらかといえば庶民的ですね。

ストラスブールとかフランスの国立大学はぼろぼろで、本当に質素な建物なんですけど、初めてパリに行ってその建物に入ったら、パリ第 9 大学の建物ですから、郵便局や銀行、そして立派な食堂などがあり、それらにすごくびっくりしました。学生たちもフェラーリに乗っているのです。しかし、イナルコの図書館に入ると、わたしのような、貧しいというか普通のお金持ちじゃない学生ばかりで、雰囲気は違っていました。

中島 イナルコではどういう先生に習ったんですか。

デュフルモン 当時の先生たちは 1960 年代の最初の日本語学部の学生でし

た。

中島 1960年代には、日本から森有正が行っていましたよね。

デュフルモン そうです。たとえば、森有正の友人であったジャック・オリガス先生が中心でした。一番有名なのはオリガス先生なんですが、歴史家としてミシュル・ヴィエという先生もいました。その先生たちが、フランス語で最初の日本に関する歴史とか文学の本を出版しました。その先生たちは必ずしもみんなが日本語を話せるわけではなく、一部には英語の資料で日本のことを論じた人もいました。大部分はもちろん日本語を知っていたんですね。もちろん日本人の先生もいました。たとえば、藤森文吉先生ですね。

中島 一番影響を受けたのは、どの先生だったんですか。

デュフルモン 日本語ですか、日本文化ですか。

中島 日本文化です。

デュフルモン 日本文化では、オリガス先生ですね。一番強い印象を受けたのはオリガス先生です。当時のフランスの大学では先生がすごく偉いというようなイメージがあり、先生の姿が目に入ると「先生、こんにちは」とか、相当丁寧に話しをしないとイケませんでした。無視されるのも当然のことで、常に偉そうな感じで、あまり親しくはなりにくかったですね。

でもオリガス先生は、自分からみんなにあいさつをしてきて「あなたの名前は何か。どこから来たんですか」とか尋ねられました。すごく驚いて、親切な方だなと思いました。彼はアルザスの出身ですから、わたしがストラスプールから来たと言ったら、「わたしはアルザス人です」と声をかけてくれました。

中島 親近感を持ってくれたんですね。

デュフルモン そうです。さらに驚いたのは、みんなにひとりずつ挨拶されただけではなくて、ちゃんとみんなの名前を覚えていたのです。当時は500人ほどがいましたけれども、みんなを覚えていたのです。

中島 500人というのは、日本語のクラスだけですか。

デュフルモン そうです。1年生だけです。いったいどうやってみんなの名前を覚えたのでしょうか。彼は、岩波書店の岩波家の方と結婚しました。最近彼の息子と親しくなって、オリガス先生が持っていた本

のすべてを見ることができました。その資料も驚くべきものでした。日本の優秀な文学者とかを知っていたんですよ。手紙も書いたりしていました。

中島 たとえばどんな方々ですか。

デュフルモン 今ちょっと覚えていないのですが。とにかく岩波書店に関わる人物たちばかりでした。

中島 オリガス先生は、シラク大統領が日本にお見えになったときの通訳をされていましたよね。

デュフルモン そうですね。

中島 非常に格調の高い日本語なわけです。

デュフルモン そうです。彼は、船で日本に行った最後の世代でした。1957年だったと思います。

中島 日本のどこにいらっしゃったんですか。

デュフルモン 間違っていなければ早稲田大学です。そして、彼は初めて飛行機でフランスに帰った最初の世代でした。

中島 そうするとオリガス先生は、森有正と重なっている世代ですね。

デュフルモン 重なっています。森有正のことをよく語っていたんですよ。

中島 駒場の表象文化論コースのパトリック・ドゥヴォス先生もオリガス先生の学生だったかと思います。実は、わたしはオリガス先生と一度だけ電話で話したんです。直接会うことは結局できませんでした。確か、2002年だったと思うんです。パリ第7大学に1カ月いたときに、オリガス先生から突然電話がかかってきました。電話で1時間ぐらいずっとしゃべったのでしょうか、わたしは「ぜひ先生にお目にかかってご挨拶したい」と言ったのですが、もうそのときには先生の体調が悪くて会うことができませんでした。その後ですぐお亡くなりになったでしょ。あのときに無理にでも訪ねていけばよかったなど、大変に心残りです。不思議なことですが、顔も見たことがないのに、声だけは覚えている先生なわけです。本当に格調の高い日本語で、「フランスの地名というのは不思議なフランス語で表現されることがあり、全然合理的じゃないんです」というような話をされていました。オリガス先生はどのような授業をされていたのでしょうか。

デュフルモン 一番思い出すのは、日本語で、日本の思想家と日本の文学者

のことを教えた時のことですね。ある思想家の伝記やその著書の内容を紹介する1ページに当たる内容を毎週1回、違う人を取り上げて教えてくれました。明治時代から始めてです。すべて日本語でした。わたしたちは日本語の単語の意味を調べた上で準備をしました。クラスで一緒に読んで、その内容を確認するようなかたちでした。ちゃんと思い出せるように記憶するんですね。中江兆民のことを初めて聞いたのもこのクラスでした。

オリガス先生以外には、エマニュエル・ロズラン先生がいました。彼はすごく若くて、文学を教えていました。またピエール・フランソワ・スウェリ先生は、中世のことを教えていました。日本語で中世に関する高校生向けの教科書を使っていました。あとは人類学者のマツセ先生や芸術史のマルケ先生ですね。アーネスト・フェノロサとか、岡倉天心の話をしてくれました。

中島 じゃあ、たくさん先生の先生に習ったんですね。

デュフルモン ええ。多くの先生がいましたし、日本語の教育としては最高だったと思います。貝原益軒の日記を文語で読ませたりもしました。3年生ですよ。3年間の学習で江戸時代の文語のテキストを読ませるなんてありえないですね。

東京学芸大学への留学、博士課程への進学、 「最後の儒者」安岡正篤との出会い

デュフルモン それでも、初めて日本に行ったときは、会話は全然だめでした。いくらビデオを聞いていても、簡単な文章も聞き取れませんでした。貝原益軒は読めるのにです。当時は1年間東京学芸大学に留学していましたが、一番役に立ったのはテレビでした。日本のテレビには字幕が付いているので、テレビを見て上達できました。

中島 学芸大学にはいつ来たんですか。

デュフルモン 2000年です。3年生になると交換留学もできるので、1年間の留学生としてみんな日本に行きたいわけです。わたしの場合は、すでに修士1年生で日本史の研究を始めていて、その論文を準備するための資料が必要なので、日本に行かないとどうしようもありませんでした。その際は、太平洋戦争時代に東南アジアに行った、高見順のよ

うな文学者のアジア観を分析しようと思っていました。

中島 学芸大学では、どの先生が受け入れ教員だったんでしょうか。

デュフルモン 当時は、日本人が通っているクラスではなく、留学生向けのクラスしかありませんでした。留学生たちは、最初の日に日本語の試験を受けて、「あなたのレベルはこれに当たるので、じゃあ中級か上級のクラスを受けなさい」と振り分けられるわけです。それでもやっぱり日本史のゼミを取りたくて、君島和彦先生の授業に参加しました。彼は共産主義者で、植民地に関する研究をやっていました。韓国や中国の歴史家と一緒に、新しい共同教科書をつくった人です。初めて韓国の人にも会えましたし、日本の植民地思想も勉強できました。そのゼミの内容は、共産主義的な歴史観なので、共産主義の語彙を日本語で学ぶことになりました。初めて日本に来たわたしにとっては大変でした。

中島 いい経験でしたね。

デュフルモン すごくいい経験でした。君島先生はまた親切な人でした。ただ日本語を勉強するには、ちょっと特殊な語彙が多かった気もします。

中島 それで1年間いて、パリに戻ったんですね。

デュフルモン パリに戻って博士課程に入学しました。日本で研究したことで、中国思想のことも忘れられなくなり、博士課程の研究課題は中国思想に関わるテーマがいいなと思うようになりました。

日本に行く前に、ピエール・ラヴェル先生の本に出会っていました。ラヴェル先生は京都大学でずっと教えていて、当時クセジュ文庫から唯一の日本思想の本を出版していました。*La Pensée japonaise* と *La Pensée politique du Japon contemporain* という本です。それらの本を読んで気付いたことは、江戸時代は儒教の黄金時代というイメージがあったのですが、なぜか近代になると儒教が急に消えてしまうのです。それはおかしいと思いました。その中にある近代思想を紹介する文章に、わたしの興味を引くものがありました。それが安岡正篤に言及した箇所でした。

中島 博士論文のテーマになる安岡正篤は、そこにあったんですか。

デュフルモン はい。Le dernier confucian つまり最後の儒者というような文章がありました。「なるほど、彼は最後の儒者なのか、それは面白



い」と思いました。

中島 そこで安岡に出会ったんですね。

デュフルモン そう、それがきっかけです。初めて日本にいた1年間、修士論文を書きながら、安岡の本とか資料を調べて、手に入れていました。フランスに帰って新しい論文を書くためには、新しい資料がないといけません。フランスに帰って博士課程に入学したら、本気で日本の哲学や日本思想、そしてそれと同時に中国哲学や近代に関するゼミを取らないといけないと思いました。そのためにアンヌ・チャン先生のをゼミを受けたわけです。

中島 そうか、これで理解できました。

中島隆博先生との邂逅

中島 2002年にわたしがパリに行ったとき、確か EHESS で講演したと思います。そのときは、わたしは内藤湖南のことについて講演をしたんですね。かなり厳しく批判する講演をしたわけです。そのときに、わたしは初めてアンヌ・チャンさんに会いました。

パリに行ったのは、フランソワ・ジュリアンさんに招聘されたからでした。当時、ジュリアンの『道徳を基礎づける』を翻訳して出版していたと思います。その後も、『勢』という翻訳も出したりしていました。そのジュリアンさんに呼ばれて、1ヶ月間パリ第7大学に滞在したのですが、彼に何かをしてもらった記憶はまったくなかったですね。実際にいろいろ面倒を見てくれたのは、ジョエル・トラヴァールとアンヌ・チャンだったんです。ジョエルが当時、EHESSの先生でして、アンヌはジョエルと一緒に、EHESSでゼミを担当していました。当時、彼女はイナルコの先生だったと思います。

それでEHESSで内藤湖南に関する発表をわたしがしたときに、アンヌがデュフルモンさんを連れてきたわけですよ。その際、確か安岡の名前もうかがっていました。あまり研究がなされていない面白い領域で研究をしようとしているなと思ったのです。あれが最初でしたね。

デュフルモン ええ。

中島 そうか、その前に学芸大学にいたわけですから、いろいろな方向が見えてきていた時期ですね。

デュフルモン はい。そのときにすごい強い印象を受けました。中島先生がフランス語で発表して、すごい優秀な学者だなと思って。内藤湖南のことは全然知りませんでしたから、いろいろ勉強になりました。当時は日本の政治史は勉強していましたが、日本の哲学はまだそれほど詳しくはなかったんです。歴史家として思想史を研究するには、歴史、政治社会史と同時に、哲学もマスターしないといけないんですが、当時は哲学が一番弱かったんです。

中島 そのときは、イナルコでアンヌ・チャン先生のクラスは取っていたんですか。

デュフルモン EHESSのゼミだけでした。イナルコの体制として、日本語の学生として博士課程に入学すると、日本に関するゼミがメインになり、傍らでいくつか外のゼミを受けるというものでした。わたしがチャン先生のゼミに通ったのも、外のゼミを受けるためでした。あとは韓国に関するゼミや、歴史学のゼミを取っていました。

中島 そのときに、アジア全体に関心も広がっていったのですね。

デュフルモン そうです。

東京大学への留学と安岡正篤研究

中島 その後に、東京大学に入りましたね。

デュフルモン はい。2003年です。

中島 バリで会った次の年でしたね。すぐに来たんですね。東大ではいかがでしたか。

デュフルモン 1年目は、本郷の野島（加藤）陽子先生のもとで日本史を学びました。1年間は大変でした。学芸大学に留学した1年間で日本語のレベルは高くなったわけですが、ちゃんとした研究をするためのレベルでは全然なかったのです。東大のゼミを受けたら、本当に早口の日本語で話しているので、しばしばわからなかったのです。

それでちょっとパニックになりました。しかも最初は2年間留学するはずでしたが、わたしはもっと長く研究するために残りたかったものですから、試験を受けないといけなくなります。そのためには日本語で論文を書かなければなりません。日本人のチューターに手伝ってもらいながら、初めて日本語で100頁ぐらいの論文を書きました。できないかもしれないと絶望もしましたが、結局はうまくいきました。

中島 それで安岡正篤で書くときを決めたわけですよ。

デュフルモン はい。わたしには安岡正篤に右翼のイメージは、最初はそれほどありませんでした。さきほど言ったように、「最後の儒者」というイメージでしたから。彼はなぜ儒教をあれほど大切に、しかも20世紀に影響力があつたのか。明治には福沢諭吉が脱亜入欧を唱えて、中国思想とか日本思想は顧みられなくなっていました。それなのに、なぜ安岡は逆に儒教をそれほど評価したのか。

そのために彼について研究したのです。わたしにとって安岡は、日本における儒教を研究するきっかけでした。最初のステップにすぎなかったのです。それでも安岡について研究してよかったと思います。安岡を通じてその人脈を意識できたからです。安岡だけではなく、井上哲次郎とか大東文化大学をつくった人たちとか、宇野哲人とか、そ

うという人物に関して研究すべきだと意識しました。

中島 これまで安岡正篤に関するアカデミックな研究はほとんどなかったわけですね。これは日本の戦後のアカデミズムの問題だと思いますが、戦前のものを否定したい、否定したいがために、抹消していくわけですよ。戦前のものを本当にきちんと検証して、一体どういう構造があったのか、そしてどういう問題があったのかを、ちゃんとした概念にしていけばいいと思うんですが、それを戦後はやらなかったんです。安岡はまさにその中の1人で、みんなが知っているけれども、見ないようにする、触れないようにするといった態度に、学者たちが終始したんですよね。それをデュフルモンさんが取り上げて、規模の大きな博士論文に仕上げました。それを拝読して驚いたわけです。しかも人脈的にもかなりの広がりがありましたね。

金鶏学院というのが一昨日のシンポジウム（「東京学派」シンポジウム シリーズ「東京学派」：その求心力と遠心力（第1回）2020年1月27日）にも出てきましたけれども、あれは植民地朝鮮にも支部があったりして、やはり当時の大東亜共栄圏なわけですよ。いったい安岡を生み出した近代日本というのは何だったんだろう、その問題点は何だっただろう、ということを実際に深く考えさせられました。

デュフルモンさんの書いたものを読んで、わたしもちゃんとやってみようと思って始めたのが、日本近代の儒教とりわけ陽明学の研究です。デュフルモンさんにこの方向性を教えてもらったという感じなんです。そこには実に複雑な構造があることがわかりました。

デュフルモン わたしにとって面白かったのは、安岡が中国の同世時代のことをちゃんと意識していたことです。中国での儒教の運命をすごく意識して、儒教のことを考えていたのです。たとえば、梁漱溟ですね。わたしは、日本の国境を越えたものとして儒教を考えようと思いました。そのために、博論の中では梁漱溟と比較した上で、安岡を通じて近代日本における儒教を、日本だけではなくアジア全体の近代的な現象として分析すべきだと考えたわけです。

中島 まったくその通りだと思いますね。

デュフルモン イデオロギーは別にして、客観的に近代アジアにおける儒教を分析しようとしたら、やはり梁漱溟とか安岡のことを見逃してはい

けないと思いました。

中島 安岡のことにもうちょっとこだわってみると、台湾に孔子の直系の子孫が逃れていきます。今の当主の方の2代前の孔徳成さんで、大変有名な方で、安岡とも関係がありました。

デュフルモン はい。安岡の葬式の時に、その台湾の人が参加したかと思えます。彼に1回メールを送ったことがあります。その時は、まだご存命だと知ってびっくりしていました。ですので、亡くなる前に急いでメールを送りました。でもやっぱり年を取られていたからか、返事は全然来なくて、残念ですけれども。

それから、安岡は1930年代にすごく韓国と関係を持っていて、韓国人の留学生を農村の学校で引き受けています。台湾とも関係を持っているはずなのですが、それほど研究は進んでいません。台湾との関係を研究したら、面白いかもしれません。

中島 安岡のような人を通じて20世紀の日本を考え直すことは、非常に大事な政治哲学、政治思想史の取り組みになりますね。

デュフルモン はい。

中島 安岡のようなケースが多いんですよ。例えば鈴木大拙なんかは、名前はよく知られていますが、アカデミズムは、鈴木大拙のことを真面目に取り上げたことはほとんどありませんでした。アカデミズムの外での実践家のような印象が強かったのでしょうか。後にブライアン・ヴィクトリアが *Zen at War* を書いて、大拙の戦時中の態度を批判したりするわけですが、大拙の思想を生み出した構造を分析することはなかなかなかったと思います。その点で安岡正篤を取り上げたデュフルモンさんの博論を、わたしは高く評価しているのです。デュフルモンさん以外にも、多くの人がこうしたことをやればよいと思いますね。

デュフルモン そうですね。

右翼としての安岡正篤

デュフルモン 2006年にフランスで博士課程を修了して、博士論文の審査を受けたときにはすごく批判を受けました。

中島 どういう批判ですか。

デュフルモン 「あなたは右翼の安岡」つまり「右翼を肯定しているんじゃないか」というものです。あるいは、「日本人でもないのに、なんで日本の右翼を肯定するのか」とも言われました。

当時は、日本学にフランスの右翼の人がいました。審査委員長の先生は、リヨン大学だったのですが、その大学に国民戦線の人がいたのです。ブルーノ・ゴルニッシュです。そのような人がいたので、安岡のような日本の右翼を取り上げる人は怪しいだろうと思われたのですね。

中島 じゃあデュフルモンさんのことを国民戦線ひとりだと思ったわけですね。

デュフルモン そうです。わたしは半分アラブ人ですから、右翼に興味があるわけではないですよ。逆に右翼から差別を受けているわけです。ですから、批判を受けてびっくりしました。

中島 そういうふうを受け取られたんですね。

デュフルモン ただ、客観的に言えば、わたしの書き方で、もうちょっとうまく安岡と距離を取ればよかったかもしれません。安岡の言ったことをちゃんと批判したらよかったかもしれませんが、当時は歴史家として、肯定も批判もせずにより客観的に書こうとしていたのです。

とにかく批判されたので、2007年はまだ東大にいましたから、これからどうすればいいのだろうかと悩みました。あれほど批判されてフランスで先生になれるのだろうか、日本に残って日本史を教えるフランス人として就職するのはありえないのではないかと悩んでいました。そこで、フランスで非常勤講師の職をあちこちお願いしていたら、ボルドー大学から返事が来て、ボルドーに行ったわけです。

中島 最初の2年間は非常勤をやっていたわけですね。

デュフルモン はい。その後、クリスティン・レヴィという先生が恵比寿の日仏会館で採用されることになり、彼女の代わりにポストに就くことができました。

中島 わたしが2002年にパリにいたときは、ちょうどシラク大統領の再選のときだったかと思います。当時は、国民戦線のル・ペンのお父さん

がすごく力を持ち始めたところでした。ところが、テレビを見ていると、ル・ペンが日本を絶賛するわけですよ、「日本は素晴らしい」と。「日本のあの移民政策を見なさい。移民をまったく入れないだろう。日本に学ぶべきだ」。わたしはぞっとして、日本はこういう風に理解されているんだということに気づきました。そういう雰囲気でしたね。

デュフルモン さきほどの日本学者のブルーノ・ゴルニッシュは、その国民戦線の代表的な人物だったのです。

中島 そうすると、彼の入れ知恵だったのかもしれませんがね。

デュフルモン そうです。彼に聞いてル・ペンは日本を賛美しているわけですよ。

中島 その雰囲気がその後も続くわけです。デュフルモンさんがイナルコで博士号の審査を受けたときも、国民戦線がどんどん強くなっていく時期ですから、審査委員長は心配をしたわけです。

中江兆民研究

中島 さて、ボルドー大学に正式に就職をしてから、中江兆民の研究を始めますね。

デュフルモン はい。中江兆民に興味を持つようになったのは、2つの理由があります。ひとつは、安岡を取り扱ってすごく批判されたことで、安岡とは反対の思想家を取り上げようと思ったことです。もうひとつは日本における儒教をちゃんと研究しようと思ったからです。松本三之介さんが中江兆民を紹介していて、そこで孟子にも言及していました。ところが、それは安岡の孟子観とまったく違ったのです。それが不思議でしたし、面白いと思いました。

それで、これからは近代日本における儒教の研究をしようと思うようになりました。兆民の書状やテキストを読んだら、大変に面白かったです。ちょうど同時期にクリスティン・レヴィ先生の論文も読みました。彼女に、『三酔人経綸問答』と一緒に翻訳しませんかと言われました。「喜んで。ぜひとも」と言って翻訳を始めます。

中島 そういう縁があったんですね。

デュフルモン 2007年のことでした。2008年にその翻訳を出版します。わたしにとって、右翼から離れて、同時に明治時代の思想と中江兆民の研究がスタートした年です。すぐに兆民におけるフランス哲学の存在に気がきました。けれども、まだフランスの共和主義のことはそれほど知らなかったのです。

ちょうどそのとき、2009年6月にフランスでようやく准教授として採用されました。同時にJSPSの奨学金を受けました。もしフランスがだめだったら日本に戻ろうと思っていたからです。ところが准教授になったので、このJSPSの奨学金をどうしようかと悩みます。結局、1カ月間だけ日本に戻りまして、東大でジャン＝マリー・ギュイヨーと中江兆民と関係について発表しました。

中島 確かその発表はUTCPでやったんでしたね。

デュフルモン UTCPです。それが中江兆民とフランス哲学の関係をとり上げた最初のものでした。しかし、調べるにはすごく時間がかかりました。なぜかと言うと、兆民は、安岡もそうなのですが、誰を引用しているのかがまったく書かれていないのです。具体的な例としては、シャルル・フーリエですね。兆民の弟子の1人が翻訳して出版した『道徳論』という本があり、中江兆民全集の第9巻にあります。しかし、その原本はいったい何かがわからなかったのです。最初はジョバンニの本を読んで、その『道徳論』と比較したのですが、合っていませんでした。ジョバンニじゃなければ、ジョバンニの周りの人で、アコラスとかかなと思いました。『道徳論』の内容はカント哲学ですから、当時のフランスでカントを紹介したり論じている人を見ると、ジョバンニ以外は、シャルル・フーリエしかいなかったわけです。しかし、シャルル・フーリエの著作を読み始めて、時間をかけてすべてを読んだのですが、『道徳論』と比較しても全然合わないのです。たとえばシャルル・フーリエは、*Sur la morale*（『道徳について』）という著作を出版していたんですが、たぶんこの本だろうと思いきや、そうではなかったのです。

何年のことだったか覚えていないのですが、偶然ボルドーの図書館に行った時に、座っている右側に本棚がありました。教育の本棚で、好奇心でそれを見ていると、シャルル・フーリエの小さな本がありまし

た。 *Petit traité de morale à l'usage des écoles primaires laïques* (『世俗的な初等教育学校で用いるための道徳小論』) です。この小さな本は、昔の本ではなくて、Marie-Claude Blais という学者がその本を再出版して紹介したものです。最近の出版ですね。その本を読むと、内容が『道徳論』に似ているのです。そこで、『道徳論』と比較したら、章の順番がまったく同じだったのです。

中島 嬉しかったですよ。

デュフルモン 嬉しかったですね。ようやく見つかったのですから。日本人もそれを全然知りませんでした。中江兆民全集でも誰の翻訳かはっきりしていないのです。ただその翻訳はちょっと変わっていて、『道徳論』を大人向けの教科書として翻訳したわけです。兆民はシャルル・フーリエのことを知っていただけではなく、翻訳もしたのです。

ただ、ひとつ不思議なことがあります。その本が出版されたのは、兆民が日本に帰った後です。つまり留学時代に読んでいたわけではないのです。いったいどうやって兆民はフランスの哲学の本の存在を知って送ってもらったのでしょうか。日本人の留学生か、フランスの人かいまだにわかりませんが、フランスから誰が送ったのでしょうか。そのことには歴史家としては興味があります。その思想家の思想形成の過程として。

中島 その後、中江兆民のNHKの番組に出ましたね。

デュフルモン それは2011年でした。その年に、『統一年有半』の翻訳を出版したのですが、たぶんそれがきっかけでNHKの人がわたしのことを知るようになったと思います。でもそれは実はレヴィ先生のおかげです。レヴィ先生も同じシリーズに出ています。それは幸徳秋水についての番組でした。

フランスにおける共和主義とライシテ：中江兆民の場合

中島 哲学的な内容に関する質問をしたいと思います。中江兆民が当時フランスに行って、共和主義者たちと付き合っていました。では当時のフランスの共和主義は、どういう考えを持っていたのでしょうか。なぜこういう質問をするかという、さっきの道徳の本は世俗的な学校向

けだというわけですよ。わたしは、2000年代、特に10年代以降フランスでは、ライシテ（世俗）という原理とリパブリック（共和国）という原理が矛盾しはじめてるように思っています。中央大学の三浦信孝先生はそれを強調していて、ライシテを重んじるあまりに、共和国の理念が弱くなっているんじゃないかと指摘されています。

2000年代になってからずっとそうですけれども、フランスでは郊外という問題が起きて、移民で入ってきたムスリムの人たちやその2世3世と、フランスの社会の間で、ある種の緊張がずっと生じているわけですよ。

デュフルモン 残念ながら、そのとおりです。

中島 そうした中で、ポスト世俗化の時代と言われるように、宗教が新しい姿をとって現れてきています。それに対してフランスでは、「わたしたちはライシテなんだ」と言って、それを抑圧する方向で動いているわけです。シャルリー・エブドが典型的だったと思います。そこでは、当時のフランスの大統領までがデモに加わりました。そうすると、共和国や共和制という概念は、必ずしも世俗と同じではなく、場合によっては対立するわけです。

デュフルモン ええ。

中島 中江兆民に戻ると、彼が当時見ていた共和主義者たちは、もちろんライシテにも力を入れていたと思うんですけども、今の共和主義とは違う考え方をしていたと思うんです。それをどう理解すればいいんでしょうか。

デュフルモン 兆民が留学時代に経験したフランスの共和主義は、基本的にはヴィクトール・クーザンの『折衷主義』の影響を受けて、ナポレオン3世に抵抗するための思想としての共和主義でした。彼が翻訳した、あるいは読んでいたフランスの共和主義は、キリスト教に反対するものでした。ナポレオン3世の独裁・専制に抵抗しながら、同時にキリスト教にも反対したのが、エミール・ニコラス、ジョバンニ、シャルル・フーリエたちです。彼らはキリスト教の道徳や価値では、民主主義になれないと思ったのです。そこで、キリスト教の代わりにカントの哲学を重視しました。

カントとルソーですね。カントとルソーの哲学に基づいて、宗教で

はなくこれからは道徳を教えたら、誰もが民主主義的な市民になれると信じていたのです。無神論的な道徳ですね。しかし、それは共和主義のグループのひとつです。たぶん兆民が一番親しく感じたグループではありますが。

しかし同時に、翻訳されたもうひとつのグループがあります。ジュール・シモンとかエティエンヌ・バシュローがそうなんですが、その人たちはヴィクトール・クーザンの『折衷主義』の弟子で、キリスト教に対して必ずしもそれほど批判的ではありません。彼らは不可知論者で、精神主義者ですから、いわば唯心論者ですね。

中島 フランス・スピリチュアリズムの系譜ですよな。

デュフルモン そうです。宗教そのものがそれほど悪いわけではありません。兆民自身も書いていますが、フランスでは誰もが共和主義や民主主義を強調しますが、やっぱり決定的なところは宗教と精神の存在です。兆民は、最初から、フランスに行く前から無神論者だったと思います。つまり精神そのものが存在しないと考えていました。中国思想の影響かもしれませんが、とにかく無神論者でした。そして兆民は、精神が存在しないならどうやって共和主義が可能なのかと考えました。ところが、フランスの共和主義者が言っているのは、ちゃんとした民主主義的な体制は共和主義で、共和主義の市民になりたければ自由な道徳が必要で、その自由な道徳を持つための条件は、精神の存在であるということでした。道徳がなければ共和主義もない。たぶん兆民はすごく混乱したかもしれません。いったいどうすれば、精神がないことを強調しながら、共和主義が可能になるのか。

結局、兆民もクーザンの『折衷主義』の影響を受けて、選択しないという態度を取りました。クーザンの『折衷主義』は、ある思想的な対立を経験したら、選択せずに、両方を紹介しながら相手に決めてもらう、というようなものでしたから。

中島 これはすごく難しいところですね。というのも、兆民はルソーの翻訳者でもあるわけです。その『社会契約論』最後のセクションは、市民宗教ですから、この問題がかなり厄介になるわけです。兆民はこの問題を避けていますでしょ。

デュフルモン はい。わざと避けています。ルソーを翻訳したからといって

完全にルソーの愛読者だったわけではありません。クーザンの『折衷主義』の方法に従って、共和主義と民主主義のいい部分だけを取って、残りは無視したわけです。兆民も市民宗教はまずいな、一般意志の専制になってしまうなど考えたのでしょう。このことはジョバンニも言っていますし、フランスの共和主義も言っています。ルソーはいい人だったけれども極端だった。

フランスの共和主義は、極端の間に調和をつくろうと思ったのです。つまり自由と平等ですね。自由は、個人の自由を強調するものですが、あまりにも個人主義的になると社会の秩序はなくなります。功利主義のミルとかベンサムが言っているのは、完全にその方向ですね。それに対して、逆に平等を強調する思想もあって、その代表がルソーと社会主義です。フランスの共和主義たちは、新しい社会主義の台頭を意識していました。ただ、みんなが平等になるのはいいのですが、あまりにもその方向に行くと、個人の自由がなくなる可能性があります。後のスターリニズムはその一例だったかもしれません。ですので、ルソーも、自由を強調している人としてはよいのですが、市民宗教とか一般意志を言うのは受け入れ難かったのです。

だから自由と平等のバランスを取って、同時に共和主義と平等主義や社会主義であろうとしたのが、フランスの共和主義です。

中島 『一年有半』とか、『続一年有半』に典型的だと思うんですが、兆民は魂がないことを強調していました。それには当時の日本の文脈があって、魂が存在しなきゃいけないという人たちがいたわけです。とりわけ井上円了がそうでした。何のためかという、兵士が国のために死ぬことができるということです。兆民はそれをよく意識していたと思います。彼がナカエイズムというある種の唯物論を主張するのは、そういう国家と魂の合体を嫌っていたわけですね。そちらの方向に日本が向かうことに対して、彼は非常に批判的な意識を持っていた。

デュフルモン それと『道徳論』を出版した理由はまさに同じです。『道徳論』が出版されたのは1888年ですから、帝国憲法が出てくる直前です。兆民はすでに意識していて、「まずいな、日本政府は宗教と国家、道徳と魂を強調した、伝統主義的なイデオロギーを準備している」と考えていたと思います。ですから、わざと別の道徳観を紹介する本を

紹介しなかったのだと思います。

中島 しかし、その意味はあんまり理解されなかったんじゃないですかね。

デュフルモン もちろんされませんでした。彼は一生懸命に、役に立つ哲学を紹介しなかったんですが、当時の日本人には、ただフランスの思想を紹介するだけに見えたのでしょうか。しかも、フランスの人気はだんだん下がってきて、逆にドイツの影響が高くなりました。いくら頑張っても、フランスの学者だというイメージがついて、その哲学の価値もそれほど高く評価されませんでした。逆に井上哲次郎がドイツ哲学の方法に基づいて哲学を論じ始めると、そちらの人気が高くなっていきます。

中島 その後に、中江兆民の読まれ方というのは変わってくるわけでしょ。

デュフルモン そうですね。

中島 つまり、より社会主義的な方向で兆民が読まれるようになっていくわけですね。

デュフルモン そうでもありません。1930年代の日本の共産主義が中江兆民について研究した文章を読んでもたら、兆民にはブルジョア的な自由主義者のイメージがあると言っています。わたしは兆民の伝記を読んで、自由主義者としての兆民が、どうして社会主義を導入した幸徳秋水の先生になりえたんだろうかと疑問でした。秋水が兆民の思想を否定した上で社会主義に行ったのか、それとも…

中島 これは当たっていることかわかりませんが、兆民は新平民主義を唱えていましたね。平民というのは、当時の新しい概念で、それによって近代的な市民を作ろうとしたわけです。幸徳秋水はそちらの兆民を強調して、社会主義的に理解していたのではないのでしょうか。

デュフルモン そうですね。さきほど言ったことは、かつてわたしがそう考えていたのであって、その後、兆民研究をやったら少しわかってきました。兆民はフランスの共和主義者と同様に、自由主義と社会主義を調和させる思想なのです。フランスの共和主義たちも平民のことをすごく大事にしていたんですが、個人の所有するものまで否定するわけではなくて、逆に資本主義を肯定していました。 Kommunismusにまでは行きませんが、やはり社会主義的な感情は持っていたんですね。ですから幸徳秋水は、社会主義的な部分を取ってアナキズムに

行ったんだと思います。

面白いことに、幸徳秋水だけではなく、兆民の弟子の中には第二インターナショナルに参加した人もいました。兆民は明治維新を経験したので、新しい国をつくるには、新しい経済が必要で、その経済は資本主義だと思っていたんです。ですので、たとえば『政理叢談』という翻訳雑誌を読んでもみると、ジャン＝バティスト・セイやバスキアとかのフランスの自由主義者や、リベラルな経済学者のものを翻訳しています。資本主義は基本的に肯定していたのですね。だからといって貧しい人のことを無視しているわけではありません。とにかく経済体制として資本主義しかない。マルクスの存在も知っていました。ちょっと調べてみたら、1870代と80年代のフランスでは、マルクスの評価はそれほど高くなく、知らない人が大部分でした。兆民はマルクスの存在は知っていたかもしれませんが、それほど決定的に反資本主義の思想だとは考えてなかったかもしれません。

中島 マルクス主義が受容されていくのは、日本でもずいぶん後になってからですからね。

デュフルモン 幸徳秋水は兆民の世代なので、資本主義のオルタナティブがあると意識していましたから、より簡単に社会主義の方に行けたのだと思います。

『民約訳解』のフランス語への「反翻訳」という試み：翻訳と哲学

中島 デュフルモンさんのお仕事で、中江兆民によるルソーの翻訳を、再びフランス語にする反翻訳という、面白い試みがありますね。

デュフルモン ありがとうございます。

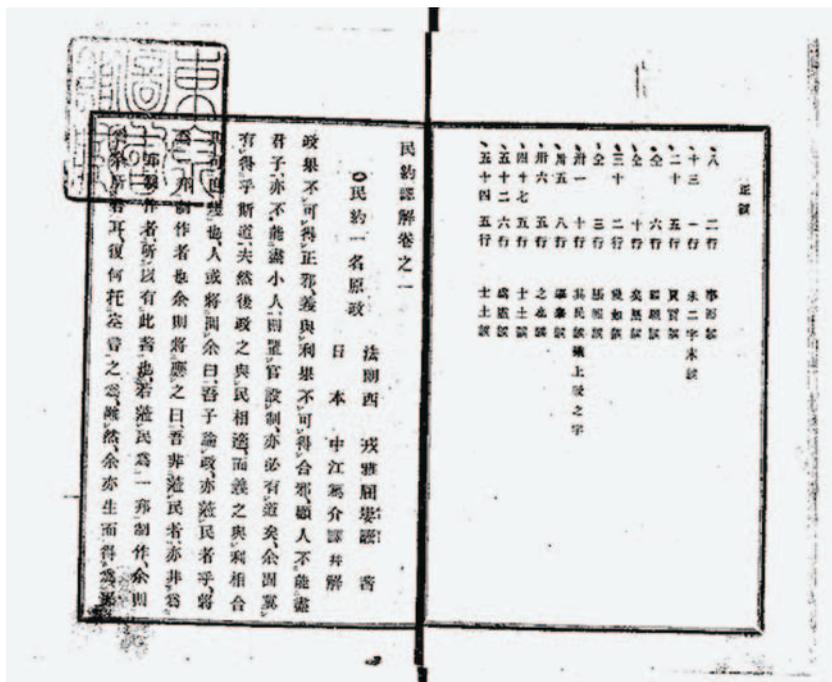
中島 その試みを通じてわかったことは何かありますか。

デュフルモン なぜ反翻訳をしたかといえば、今までの中江兆民研究は、ルソーの言っていることと兆民の翻訳を比較して、兆民は正しくルソーを理解したかどうかを論じていました。わたしが気づいたのは、兆民はルソーだけではなく、フランスの当時の哲学をちゃんと理解して、それを紹介したかったということです。無神論でも、唯物論でも、唯心論でも、すべてを紹介したかったんです。翻訳されたものは兆民自

身が読んでいたものです。それらは彼の思想の形成に役立った本なんです。ということは、翻訳そのものが単なる翻訳ではなく、自分の哲学であったということです。それは2つの層を持っているテキストなんです。メタ・テキストの中のテキストですね。

『民約訳解』には単にルソーが言っていることだけではなく、兆民が言っていることも含まれています。こうして、それは単なる翻訳ではなくて、まさに兆民の新しい本だと思ようになりました。でも、じゃあどうやってそれを証明できるんだとなります。そこで、フランス語にしてみたのです。

その出発点は簡単で、ルソーの原本を読んだら『民約訳解』とだいぶ違うわけです。内容としては一緒なのですが、兆民はルソーを受け売りしているわけではなく、ルソーの言っていることに付け加えたものがあるのです。その付け加えたものを明らかにするには、フランス語であらためて翻訳しないとイケないと思いました。



中島 訳してみてもうでしたか。

デュフルモン まず漢文の勉強になりました。わたしは中国語を勉強していないので、漢文にそれほど強いわけではありませんでした。ジャック・ジュリーという丸山真男の専門家に手伝ってもらって、一緒に考えました。読み下し文も読んでいきました。ポイントは、漢字と言葉の意味ですね。わたしは兆民の論文をよく知っているのですが、彼が選んだ言葉は特殊な意味を持っています。ジャック・ジュリーさんは、「フランス語ではこの言葉がいいだろう」と言って、ときどき議論になりました。

兆民が漢文で書いたものと彼の別の論文を比べながら、彼が言っている言葉を意識して理解した上で、フランス語で表現しました。兆民は、中国語の儒教の言葉を、新しい意味で使っているのです。

中島 そうでしょうね。

デュフルモン 『民約訳解』だけではなくて、そのような翻訳言葉は、『政理叢談』とか「民主国ノ道德」、つまりジョバンニの翻訳やフーリエの「倫理学」「倫理学史」の翻訳にも現れています。やはり兆民はちゃんと考えていたのです。考えた上で、自分の翻訳の言葉を選んだのです。そのニュアンスをフランス語で表現しようと思いました。たとえば、*volonté générale*（一般意志）、*volonté particulière*（特殊意志）とか、国家は違う言葉になります。結論として考えたのは、儒教の影響を受けた人たちに、どうやったらうまく民主主義を説明できるかを兆民は考えたのだと思います。それには、その人たちが知っている言葉を使って、新しい意味を付け加えるしかありません。

たとえば、「君」は普通は君主です、1人の王のことです。ではどうやったらわれわれはその君主になれるのでしょうか。つまり主権を持つことができるようになるのでしょうか。『民約訳解』を読むと、「君」は1人の王のことではなくて、個人個人みんなが集まると「君」になれると翻訳で言っているのです。

『民約訳解』を読むと、本当にわかりやすく「君」や「民」といった昔の言葉、昔の漢字に新しい意味を加えて表現していたと言えると思います。

中島 ある意味で、それが哲学の試みですよ。今の日本では大体、英語の

概念をそのままカタカナにして、まったく努力をしないんですね。それでは概念創造ができないという気がするんですが、中江兆民はまさに新たな概念創造をやったわけです。その意味では、哲学者らしい哲学者だったという気がしますよね。

デュフルモン そうです。ですから一生懸命にフーリエの「倫理学」「倫理学史」とかを翻訳したのです。もちろん彼は時間もお金もなかったので、かなり選択的に翻訳していました。そして、翻訳を通じて、同じテキストに自分の哲学を表現しようとしたのです。もちろん失敗もしたのですが、哲学のテキストとしては意味があると言えます。

中島 それをあらためて反翻訳したデュフルモンさんにとっても、それは非常に哲学的な行為だったんじゃないでしょうか。つまりフランス語の方もつくり直さなければならなかったでしょうから。

デュフルモン そうですね。翻訳したときは自分なりに考えて翻訳していました。ルソーを自分で解釈して日本語で翻訳した兆民を翻訳するとしたら、兆民と同じようにデュフルモンの解釈で兆民の哲学を紹介しているんじゃないかと思ったわけです。

中島 そうですよ。

デュフルモン 永遠に続いていきそうな思想様式になってしまいました。

中島 でも、それでいいんじゃないですか。

デュフルモン とにかく仕方がないですね。わたしが翻訳した『民約訳解』の翻訳は、兆民の哲学ながらもデュフルモンの哲学じゃないかと。

中島 もちろん。そうじゃなきゃ面白くないですよ。

イスラームへの入信、フランスにおける宗教と政治

中島 最後に、宗教の話を伺いたいと思うんですが、10代でキリスト教に入信したとうかがいましたが、でもキリスト教に対して疑問を持ったわけですよね。で、その後はどうなったんでしょうか。

デュフルモン キリスト教から離れて、結局ムスリムになったのです。ムスリムとしての生活を始めたのは、1998年か99年頃のパリです。当時は人間が亡くなることの意味を考えて、宗教を信じれば救われると思っていました。薬としての宗教観ですね。でも当時はイスラームの

ことを全然知りませんでした。母は全然教えてくれなかったのです。きっかけになったのは、コーランを読んだときです。コーランは、わたしにとって不思議な本で、キリスト教とユダヤ教の、聖書やトーラーとは違って、歴史観を持っていない内容です。つまり歴史を排除しているんですね。過去について話しながらも、歴史として紹介しているわけではありません。いまだにコーランに対する理解はすごく間違っていると思います。イスラーム学者でも、コーランの内容はただ聖書の内容を繰り返しているにすぎないと言います。ペルシャの影響とかキリスト教を認めていない著作を使って何か別な内容を加えるものにすぎないとまで言うのです。でもそれは完全に間違っていると思います。つまり歴史を持ち出して、コーランを批判する価値はあまりないと思うのです。

中島 ちなみにそれはアラビア語で読んだんですか、フランス語で読んだんですか。

デュフルモン フランス語です。アラビア語もちょっと勉強しましたので、両方でしょうか。アブラハムとかモーゼといった預言者は実際にはいなかったと言うことはできるでしょう。だからキリスト教をやめた人もいたわけです。でもコーランが言っているのはまったく違うのです。

中島 歴史家なんだけれども、歴史のナラティブとは違うものがそこにあった。それが魅力的だったわけですね。

デュフルモン そうです。でも今わたしが言っているのは、今のムスリムたちの理解とは違います。他のムスリムたちに聞いてみたら、「アブラハムとかモーゼといった人が実際にいたのか」と聞いたら、「もちろん、いました」とみんなは答えるはずですよ。

中島 歴史的なものだと理解しているのでしょうかね。

デュフルモン そう。だからわたしの考え方が変なのだと思います。

中島 そうすると、ムスリムとして生きていこうと思って20年ぐらいですね。

デュフルモン はい。本気で1日5回の祈りをしたり、断食したりを始めました。コーランを読んで、神はいると思いましたが、神は人間ではありません。亡くなったら精神が本当に残るのかどうかは誰も知りませ

んし、わたしも全然証明できません。ただ神様を信じて、亡くなったらどちらでもいいわけです。

中島 兆民も知らなかったわけですね。ムスリムになってからお母さんとはイスラームの話をするようになりましたか。

デュフルモン あんまりしないですね。母は本当に昔の伝統の上で育ってましたから、わたしから見ると迷信がいっぱいあるように見えます。

中島 イスラームを見るときにも、全然見方が違うわけですね。

デュフルモン そうです。人によって違います。たとえば、伝統的に北アフリカの場合は、普通の人が真面目に神を信じたら聖人になるというイメージがあります。その人が亡くなると、その墓がちゃんと守られて、人がそこに巡礼して、その人に祈ります。日本の場合も神社に祀りますね。人が亡くなったら神になって、神と同じになります。わたしから見ると、お墓の中にいるのは、わたしのような人間ですから、なぜ同じ人間にお祈りをするのか疑問です。

中島 さきほど政治的なフランスの状況の話をしたと思いますが、2000年代になってフランスの社会の中で、ムスリムとどういのかたちで共存するのが大変難しい問題になっていきました。いまだに解決しないところがあるんですけども、そういった問題に対してはどういうふうに見ていたんですか。

デュフルモン わたしから見ると、フランスの政府は新しいフランス人として人を迎えることをまったく準備していませんでした。1960年代に経済的な理由から、北アフリカとかの国から人を迎えました。一時的にフランスで生活したらいつか帰るだろうと考えて、街の郊外に住んでもらいました。子どもができたなら、あるいは向こうから家族が来たら、普通の学校に通ってもらえばいい。ところが、フランスの社会は本当に矛盾だらけです。無神論者がかなり多いと言われていますが、しかし、実際に宗教と政治が分離しているのであれば、なぜ休日はキリスト教系の休日なのでしょう。この点ではフランス革命のほうが正しかったと思います。完全に新しいカレンダーにしましたから。アメリカのように、宗教をある程度認めるなら、キリスト教だけではなくて仏教、イスラーム、ユダヤ教、何でもいい、すべての休日をみんなの休日にすることもできます。完全に宗教を排除するか、あるいは

すべての宗教を認めるかでしょう。どちらもいいのですが、その矛盾を解決する必要はあります。

中島 三浦先生の主張を思い出すと、共和国であるならば共和国のメンバーは本来誰でもいいわけです。宗教的な心情は何でもよくて、キリスト教を信じる信じない、イスラームを信じるか信じないかは、問う必要はありません。共和国の名の下ではみんな平等です。ところがフランスのライシテ（世俗主義）は、これ自体がひとつの宗教じゃないかという意見もあります。キリスト教を否定する人もいますが、キリスト教の枠組みを意識した上でのライック（世俗的）なんじゃないかというわけです。そこにムスリムが入ってきたときに、場所がないわけですよ。ライシテの原理からして、「君たちは宗教に深く入りすぎている。公的空間では宗教的なものはやめなさい」という法律ができてしまいます。

デュフルモン 最近までフランス人は、ムスリムたちがフランスの国立学校に通ったら、科学とか近代的な教育を受けるので、宗教を自分でやめると思っていました。実際は、全然やめませんでしたし、逆にさらに強調しはじめたんですね。

中島 そうでしょう。

デュフルモン いったいなぜムスリムたちはわれわれのように宗教をやめないのかと訝しがっているのです。ユダヤ教系のフランス人もいますでしょ。彼らはキリスト教系のフランス人と同じように、世俗主義の影響を受けて、自分の宗教をやめた、もしくはあまりやっていないので、問題になりません。ところが、ムスリムたちは1日に5回お祈りしたりして自分の宗教を強調するので、困っているわけです。国家と宗教の複雑な関係は、依然として変わっていないのです。

中島 中江兆民が見ていた社会と今とが実はあんまり変わっていないということですね。

デュフルモン まったく変わっていないです。純粹に政治的にいえば、せっかく共和主義をつくったのになぜ大統領が王のような立場にいるのでしょうか。王のようにぜいたくな生活を送って、宮殿みたいなところに住んでいます。わたしから見た理想は北ヨーロッパですね。ノルウェーやスウェーデンのように普通に自転車に乗って大統領の仕事をする

しにいく人がいるのが、共和主義であり、民主主義だと思います。フランスはやっぱりおかしいと思います。

中島 フランスの民主主義は、まだ遠いわけですね。

デュフルモン そうです。ある意味でフランス革命はまだ終わっていないんですね。ピエール・ロザンヴァロンが言っているように、フランス革命の後に、市民の定義が2つにわかれてきました。citoyen capacitair つまり能力を持っている市民というような、新しい定義が出てきました。

まずは、普遍主義的な考え方を持っている人は誰でも市民になれる。女性にせよ男性にせよ、フランス人でもない外国人にせよ問題ないはずです。子どもの時代にちゃんとした教育を受けて、政治的な意識を持てば選挙に参加できるわけです。

ところが、もうひとつの考え方として、主権は個人々人にあるわけではなくて、理性にあるというものがあります。みんなが政治に参加するわけではない。優秀な市民しか、政治には参加できないと考えるのです。教育の機能として、国立学校の上にあるエコール・プレパトワール、エコール・ノルマルのようなエリート向けの学校が強調されます。

結局、第3共和主義になったときに勝ったのは、後者の考えです。その人たちからすれば、われわれはみんなフランス人ですが、ユダヤ教とか宗教問題を別にしても、基本的にみんな当時は農民なので教育を受けていません。ですので、うまく政治には参加できない。だからとにかく彼らに教育を与えようと考えたのです。しかし、理性に基づいた政治が必要なのでエリートを養成しようというわけです。ですので、同時に2つの体制が出てきたわけです。これは大いに問題がありますし、ネオリベラリズムの下で再生産されていくかもしれません。

そのエリートの中でも、特に昔の社会党の人たちは、ムスリムとかイスラームを強調している新しいフランス人はどうせだめで、2級市民だと考えています。収入の低い仕事をやってもらって、昔のようにエリートを教育しようと考えます。

だからこそ、今のフランスは黄色いベスト運動が起きるわけです。彼らは「わたしはちゃんとした教育を受けたので、政治に参加できますし、ちゃんとした意見を持っています」と言うのです。専門家とか

安岡的な官僚主義の考え方は嫌だと言っているわけです。逆にマクロン派の人たちは、「いや、あなたたちはフランスにふさわしい政治を理解できないし、経済も理解できないので、われわれに決めてもらうべきだ」と言うのです。

中島 デュフルモンさんが小さいときに歴史を勉強すると、古代ギリシアが面白かったとおっしゃいましたね。フランスの現状は、まさに古代ギリシアの夢が続いている感じですね。自由民がいて、奴隷がいる。そんな世界がフランスでまだ維持されているという夢を見ている人がいる。その背後には、古代ギリシアを自分たちの起源にするという近代の発想がいまだにあるわけです。そろそろ縁を切った方がよいのかもしれない。ギリシアはフランスと関係ないわけです。ところがある時期から、ギリシアを自分たちの、ヨーロッパの起源だというふうに一生涯懸命みんなが考え出しました。そこからいろんなことがおかしくなったような気がしています。

デュフルモン フランス語も、ラテン語とギリシア語の混淆として形成されたでしょ。

中島 言語学のほうからはそういうことを言うんですが、それ自体があまり意味がないわけですよ。言語によって別にわれわれの思考は決定されませんから。本当に皮肉だと思いますよ。フランス革命をしたフランスが、普遍主義的な市民に向かわないで、ギリシア的な、自由民と奴隷の社会へ向かっているというのは。それがあるから郊外問題とか、ムスリムとの共存が本当に難しくなっている気がするんですよ。

デュフルモン なるほど。

中島 でもなかなかこれはすぐには変わりませんね。フランスの社会には非常に固いところがありますので。ただ、最近はどうですか。ちょっとは変わってきましたか。

デュフルモン はい、徐々に。若い世代は基本的に外国の出身の人が大部分ですから。その人たちを無視することはもうできなくなりました。彼らに仕事を与えないと、フランスの経済はもう立ち行きません。ですから、最近外国系フランス人の政治家とか経営者が出てきました。でも女性の場合は、アメリカとかイギリスのように、自分の宗教を強調しながらも客観的に政治の仕事をしている人の姿はあまりいないです

ね。たとえばムスリムの場合、ベールを自分の意志で着ている人が、政治家としては出てきていないです。将来的には出てくると思いますが、ベールを被っている女性には、自分の意志で被っているわけではない人も少なくありません。自分の意志で自分のことを決めたらよいと思います。宗教はやめたいならやめればいいですし、宗教を守ってベールを被りたいならそれもいいと思います。

中島 最後に、これからのデュフルモンさんの、学問的な目標はどのようなのでしょうか。

デュフルモン これからやりたいのは、ヨーロッパ哲学がどういうふう to 翻訳されたかですね。中江兆民だけではなくて明治時代の日本を中心にしたいと思っています。今年、モンテスキューの『法の精神』がどういうふう to アジアで翻訳されたのかを考えようと、学会を主催しようとしています。

これからはモンテスキューとかトクヴィルといった哲学がどういうふう to 日本語に翻訳されていったのかという課題を取り上げたいと思います。同時に近代日本における儒教の人脈をさらに深く研究して、いくつかのケーススタディを行うつもりです。

中島 大変に楽しみです。本日は長い間ありがとうございました。

デュフルモン どうもありがとうございました。

対談の後に

世界の未来を創るために

エディ・デュフルモン

莊周の夢のように、あるいは『三酔人経綸問答』の南海先生のように、研究に没頭したら周りの世界への意識が希薄になることはありうる。中島先生と知り合ったのは20年前のことだが、初めてアンヌ・チャン先生のゼミで遭遇したのが昨日のこのように思われる。わたしの場合は、中島先生がいなければ、東京大学での留学生活も日本思想史の研究も不可能だったので、中島先生に対して恩を感じていることはいうまでもない。それほど長く一緒に研究の道を歩きながら、単に学術的な関係ばかりでなく、人間としても二人の関係を維持できるとは人生の豊かさそのものではないか。その意味で、ダイアログがきっかけで、東アジア藝文書院の方々と知り合うことができたのもありがたい。

わたしの研究についてのみならず、人生についても聞かれたのは初めての経験であった。むしろ、そのような機会に恵まれたことがある歴史家は少ないだろう。この機会は自己宣伝よりも、中島先生と話しながら、自己反省をする機会であったと感じた。学術論文ではいえないことを、ただの人間として、否、世界の市民として、日本や全世界の人々に言いたいことを少しでも表現できてよかった。世界の未来を創るには、歴史が必須であるけれども、わたしが歴史家として信じているのは、ある国またはある地域（例えばヨーロッパ）を中心としない世界史が何よりも必要であるということだ。その意味で、近代化への過程における日本の特殊性は、間違いなく、未だ民主主義の普遍性と民主化への道を歩んでいない国々にとって有意義的なケースだと思っている。かつて、あらゆる国の歴史は民族のための国史であったが、現在の世界では、これから世界のための国史を、換言すれば世界史としての国

史、地域史を創造すべきだ。わたしは、いわゆる「Transfert culturel」のもとで、相互交流の現象として政治思想の著作とその概念を取り上げて考えてみたい。

将来の世界に対する人文科学の必要性という問題は、むしろ哲学にも深く関わっている。ギリシャ語の哲学は、ヨーロッパの専有物でもなく、中国の思想は東アジアの専有物でもない。したがって、一貫してヨーロッパ哲学と中国思想の対話の上で現代の問題を論じている中島先生の著作は貴重なものといえよう。最近出版された『世界哲学史』のシリーズもそうだろう。世界化といえば、多言語主義であると信じているので、中島先生の著作をフランス語に翻訳すべきである。いずれその作業に参加させていただけるのであれば、感謝の気持ちをもって喜んでさせていただきたい。

対談の後に

学問は喜びそのものである

中島隆博

大学にいと時間感覚が複雑になりすぎて、時折よくわからなくなることがある。今日一日をどう乗り切るかを常に考えながらも、一週間、一ヶ月、一年、数年、十年、二十年といった単位で、研究や教育を意識しなければならないからだ。とりわけ、一人の研究者が育つのをサポートするためには、この複数の時間感覚がどうしても必要になる。

若い学生がテーマを決めて論文を書く。そのテーマがうまくいくときもあれば、うまくいかないこともある。難しいのは、悪い成功とよい失敗があるということだ。つまり、個々の論文がうまくいけば、よい研究者になれるわけではないし、うまくいかないことが、長い目で見ればかえってよい研究者を育てることに寄与する場合があるということだ。

そのため、若い研究者に接するときは、個別のテーマや論文の完成度ばかりに注視しないようにいつも自戒している。その代わりに、できているかどうかというよりも、その人の問いにどのような「おもしろい」があり、何をどう望んでいるのかを感じ取りたいと願っている。いったい将来この人はどうなっていくのだろうか。いくつもの時間が、目の前の人の上に重なっていく。こんな想念は、当然ではあるが、当の本人の預かり知らぬことである。

ただ、若い研究者が、ふとした瞬間に、自らの学問への情熱的な「おもしろい」と、自分のことをうまく突き放す冷静さを同時に見せてくれることがある。その瞬間は、何かが繋がったように思われる貴重なときだ。多くの艱難辛苦が待ち構えているとはいえ、きっとこの若い研究者は学問的に成熟していくのではないか。そして、目の前の若者の今後の歩みは、学問自体がよりよいものになっていく道行きになるのではないか。こんな夢のようなことを

思わされるのである。

今回のエディ・デュフルモンさんとのダイアローグは、若い研究者の学問的な成熟の過程を見事に示してくれている。中江兆民の反翻訳という現在の重要な仕事に至るまでには、いくつもの偶然的な出会いがあり、それが一人の日本思想史の研究者を育てていった。しかし同時に、デュフルモンさん自身の「おもい」がなければ、それらの出会いが血となり肉となることはなかったのである。

大学に入る頃までは精神的に幼かったとデュフルモンさんは述べているが、学問にとっては、ある種の幼さは決定的に重要である。いや、学問的な成熟とわたしは繰り返し書きつけてはいるが、それはひょっとすると幼さへの遡行であるのかもしれない。つまり、世界との親密さや生の横溢という幼さに、学問的な成熟を通して、わたしたちはもう一度立ち直そうとしているのかもしれない。

デュフルモンさんの周りを照らすような明るさは、こうした幼さへと遡行する学問的な成熟に裏打ちされているように思われる。たとえこの推測が当たっていなくとも、そうした明るさは、学問にとっては不可欠のものだ。なぜなら学問とは喜びそのものだからである。

それにしても、デュフルモンさんと出会ってから、すでに二十年近くが経っていたとは驚きであった。しかし、初めて会ったときから、その喜びに満ちた明るさは何も変わっていない。そして、その明るさに秘められた「おもい」を、デュフルモンさんは努力を重ねて自ら実現していった。大事なことは、デュフルモンを固有名詞であると同時に一般名詞として理解することである。デュフルモンさんは、すべてのデュフルモンという若い研究者たちに力を与え、喜びとしての学問を示してくれているのである。

2020年6月

成熟を拒絶した十代の頃を思い出しながら



対談者について

エディ・デュフルモン (Eddy Dufourmont)

ボルドー・モンテーニュ大学日本学科准教授。専門は近現代日本思想史・政治史。著書に『日本におけるルソー——中江兆民とフランス共和主義 (1874年-1890年)』(ボルドー・モンテーニュ大学出版)、『日本政治史——1853年から現在まで』、『儒教と保守主義——安岡正篤の知的遍歴 (1898-1983) (同上)』など。また、フランス語で中江兆民の『三酔人経綸問答』、『一年有半』、『民約訳解』の共訳がある。

中島隆博

東京大学東洋文化研究所教授・同大東アジア藝文書院院長・中国社会文化学会理事長。専門は中国哲学、比較思想史。著書『悪の哲学——中国哲学の想像力』(筑摩選書)、『莊子——鶏となって時を告げよ』(岩波書店)、『思想としての言語』(岩波現代全書)、『残響の中国哲学——言語と政治』、『共生のプラクシス——国家と宗教』(以上、東京大学出版会) など。

※この対談は2020年1月29日、EAA本郷オフィス(東洋文化研究所208)にて行われました。

編集者

具 裕 珍 (EAA 特任助教)
崎濱紗奈 (EAA 特任研究員)
宇野瑞木 (EAA 特任研究員)

EAA Booklet 6

EAA Dialogue 5

Eddy Dufourmont × Takahiro Nakajima

[エディ・デュフルモン × 中島隆博 2020年1月29日]

著 者 エディ・デュフルモン 中島隆博

発 行 日 2020年7月1日

発 行 者 東京大学東アジア藝文書院

製作協力 一般財団法人東京大学出版会

デザイン 株式会社 designfolio / 佐々木由美

印刷・製本 株式会社真興社

© 2020 East Asian Academy for New Liberal Arts,
the University of Tokyo